ネパールから自分をみつめる

学校所在府県：大阪府
学 校 名：大阪府立箕面高等学校
名　　前：水谷　雅哉（社会）
実践教科：国際社会と日本（現代社会）・地理 A

指導時数：４時間
対象学年：高校１年生（国際科２クラス　普通科１クラス）
対象人数：120 人

1. 教師海外研修を通して感じたこと

「持続可能性」。この教師海外研修を通して、一番悩み、考えた言葉である。

ネパールの生活は、想像を絶するものだった。機能していない信号機、何重にも絡み合った電線、舗装されていない道路、地震によってヒビの入った住居。日本の生活と比べて見ると、世界は大きく違うように見え、毎日、毎時間驚きの連続であった。ただ、それは“表面的な”違いであって、地理的な要因や宗教的な要因から生まれる貧困の問題や、主産業の発展の遅れから派生する人口流出の問題が、その背後に潜んでいることに目を向けなければならない。

表面的な違いではなく、目には見えない“内面的な”違いに私は驚かされた。村のホームステイ先では、おじいちゃん、おばあちゃん、ちいさな子ども、みんなでローソクを囲んで食事を取っていた。そこには自然と会話が生まれ、あたたかい笑顔が溢れていた。星明りの下で歌を歌って踊ったあの幸せな時間は、そう日本では体験できないものだったと思う。近所の子どもたちはよく家を訪ねて遊びに来たし、ご近所さん同士の関係はものすごく深いように感じた。街の人の温かさも同様だった。一緒に行った嶋田先生が路上でギターを弾き始めると、いつしかそこはライブ会場と化し、子どもも大人もみんなあたたかい笑顔を送ってくれた。JICA ネパールで働く方から聞いた話で印象に残っているのが、「ネパール人は自分たちが貧しいとか不幸せとあまり思っていない」というもの。物質的な豊かさに翻弄されるのではなく、人と人とのつながりから生まれる心の豊かさをネパールの人たちは持ち合わせているように感じた。

JICA は、そんなネパールの暮らしを、良い意味でも悪い意味でも激変させうるチカラを持っている。だからこそ、「持続可能性」という言葉を大切にしているのではないだろうか。大きな道路を建設して終わりでなく、ネパール政府が主導で、整備舗装していける体制を構築する。青年海外協力隊員の方が、地震被害のあった学校で行う防災教育も、隊員が現地の子どもに直接行うのではなく、隊員が現地の教員に防災教育を行い、現地の教員に覚えてもらう。そうすることで、隊員が日本に帰っても持続していける体制を構築する。JICA の方は、ネパール人が、ネパールの未来のために実行し続けられる体制、持続できる体制の構築に尽力されていた。

何かをしてあげるのではなく、共に歩む。そんな、当たり前に大切なことを改めて教えていただいた。私もネパールの方々から“心の豊かさ”を学び、私たちから送った防災の歌やダンスを通して、地震の怖さや自分の命を守ることの大切さについて共に学ぶ事ができた。「持続」していける社会のために、「持続」できる活動をこれからも大切にしていきたい。

最後に、一緒に行った先生からいただいた印象的な言葉を残しておきます。「折鶴をプレゼントするのではなく、鶴の折り方を教えることが大切。」この言葉に、この研修の学びが集約されているように思う。

2. カリキュラム

（1）実践の目的・背景

本校は、「グローバル教育」の創造を方針に掲げ、世界が抱えている問題から身近な問題まで、さまざまな問題を他人事にせず、積極的に解決しようとするマインドを培ったグローバル人材の育成を目指している。担任を受け持つ国際科の生徒は特に意欲的に英語を学習し、将来は世界で活躍したいと語る生徒が多い。では、グローバルな人材とはどのような人材なのだろうか。２つ重要な力があると考えている。１つ目は、多様な異なる価値観や文化があることを認識し、それを受け入れようとする受容力である。２つ目は、利害関係を超えて、双方の持続可能な未来への選択肢を選べる思考力・

判断力である。
　本校生徒の意識としては、「世界＝欧米諸国」「世界で活躍する＝海外で働く」にとどまっており、グローバル人材として必要なスキルや具体像、理念について考えるといったところにまでは、至っていないというのが現状である。日頃の教育活動の中で、世界とどのような関わり方をしたいのか、どういった人々とどう共生していきたいのかというところまで、一歩踏み込んで一緒に考えられるように私自身、試行錯誤している。
　この背景を踏まえ、実践の目的としては、ネパールの実情と問題を理解し、その問題を改善しようとする過程を JICA の視点、NGO の視点で捉える学習を通して、持続可能な活動、持続可能な支援の重要性について理解することである。生徒と共に、「世界は欧米諸国だけで成り立っているのではない」ということを再認識し、世界約１９０カ国それぞれの国と、それぞれの課題解決に向けてどう生きていくのかを考えられる。そしてこの活動を通して、自分自身の未来に向けても持続可能な選択ができる力を培ってもらいたい。

（２）授業の構成

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1 時限目 ネパールと日本のつながりを考える ①ネパールと日本のつながりについて理解する。 ②ネパールの子どもたちとともに学ぶことができる防災について考えることができる。	［導入］ ●国籍・地域別　在留外国人の穴埋めクイズ。 ［内容］ ●ネパールの地理的概要を押さえる。 ●日本とネパールの共通点について考える。（状況に合わせて、自然環境に限定する。） ●グループの隊形になり、ネパールで実践してみたい日本の防災教育を書き出す。	●ワークシート ●世界地図 ●スライド
2 時限目 青年海外協力隊員の活動から考える ①國友さんや川喜多さんが大切にしていることや想いを考えることができる。 ②２枚の写真から想像し、話を組み立て、それを伝えることができる。	［導入］ ●学校の写真を３枚見せる。気付いたことを交流する。 ［内容］ ●JICA、青年海外協力隊の紹介 ●國友隊員が行った防災教育の実践報告 ［導入②］ ●ラプシーキャンディと川喜多さんの２枚の写真を見せる。 ［内容②］ ●ストーリーを考えさせて交流。 ●村でビジネスを興す活動をされている青年海外協力隊員の活動を知る。 ●２人の共通点として、現地の人たちが「必要」としていて、かつ「継続」していける活動をしていることに気付く。	●写真 ●ネパール版おはしものバナー（実物） ●ラプシーキャンディ ●ワークシート
3 時限目 JICA の活動から考える ①ＪＩＣＡが大切にしている支援のあり方について考えることができる。	［導入］ ●ネパールの道路事情がわかる写真を３枚見せる。 ［内容］ ●JICA は ODA をつかって道路を作る事ができるが、どんどん作る事はしない。 ⇒なぜ作らないのかをグループになって考える。（のちに交流する） ●シンズリー道路を紹介。また、シンズリー道路ですら穴があいていたりする現状を伝える。なぜ直さないのかを改めて考えさせる。 ●日本政府がやり続けるのではなく、ネパール政府と現地企業が連携して修繕していく事が、自立や未来への持続可能性につながっていくことを知る。	●写真 ●ワークシート ●シンズリー道路に関する本

4時限目 ネパールの電力事情から考える ①日本の暮らしとネパールの暮らしを比較することができる。 ②日本や自分の未来について考えることができる。	［導入］ ●道路に警察官が立っている写真を見せる。 ●信号はあるが点灯していないことに気付かせる。 ［内容］ ●ネパールは雨季に６時間、乾季に１２時間計画停電していることを伝える。 ●なぜネパールは停電していて、日本は停電がほとんどないのかを考える。 ●ネパールは水力発電、日本は火力や原子力に依存している。 ●「水力」「火力」「原子力」のメリット・デメリットを考える。 ●持続可能な未来に向けてどう考えるか交流する。	●写真 （パワーポイント） ●ワークシート

3. 授業の詳細

１時限目：ネパールと日本のつながりを考える

ねらい…①ネパールと日本のつながりについて理解する。
②ネパールの子どもたちとともに学ぶことができる防災について考えることができる。

◆導入◆
・国籍・地域別　在留外国人の穴埋めクイズを行う。（ネパールは第６位。）
◆内容◆
・ネパールの地理的概要を押さえる。
・日本とネパールの共通点について考える。（状況に合わせて、自然環境に限定する。）
・グループの隊形になり、ネパールで実践してみたい日本の防災教育を書き出す。
・交流する。

ココがポイント

ネパール出発前に行った。現地で行う防災教育を一緒に考えてほしい、協同しようと投げかけることで多くのアイディアが出た。帰国後の授業に連続性をもたせることができた。

生徒の反応

▶かなりの生徒が、在日ネパール人が多いことに驚いていた。
▶机の下に隠れることや「おはしも」の造語を作って自分の命を守る防災教育の実施を提案してくれた。

◆所感◆　同じ地震の多い国として、どんなことができるだろう、どんなことを伝えられるだろうと懸命に悩む生徒の姿が印象的だった。また交流を通して、みんなが提案してくれる訓練や造語が共通していることに気付き、日本の防災教育のシステム化が進んでいる事と浸透ぶりに驚いた。この文化や歴史の蓄積をネパールに伝えたいと感じた。

２時限目：青年海外協力隊員の活動から考える

ねらい…①國友さんや川喜多さんが大切にしていることや想いを考えることができる。
②２枚の写真から想像し、話を組み立て、それを伝えることができる。

ラプシーキャンディ

◆導入◆
・学校様子を撮影した３枚の写真を見せる。気付いたことを交流する。

◆内容◆
・JICA、青年海外協力隊の紹介する。
・國友隊員が行った防災教育の実践報告をする。
・避難訓練の様子と私たちが行った防災教育の動画を見る。
◆導入②◆
・ラプシーキャンディと川喜多さんの２枚の写真を見せる。
◆内容②◆
・ラプシーキャンディーと川喜多さんをつなぐストーリーを考えさせて交流。
・村でビジネスを興す活動をされている川喜多さん（青年海外協力隊員）の活動を知る。

工場長家族と
川喜多さん

ココがポイント

単に川喜多さんの活動を紹介するのではなく、物語を生徒に考えさせる事で、川喜多さんの苦労や想いに気付かせたかった。

生徒の反応

▶現地で行った避難訓練のビデオを食い入るように見ていた。
▶ストーリーを考えるのは難しく、手が止まっている生徒もいた。

生徒の感想

（國友さん、川喜多さんが大切にしていることはどんなことだろう）
▶たくさんの人を笑顔にすること。
▶現地の人と、いっしょに問題を解決していくこと。
▶村の人と積極的に会話などをして、同じ目線で活動していくこと。
▶まず、現地の人と交流をして信頼されるようにする。そして現地の人にとってよい事を考える。

◆所感◆　２人の共通点として、ネパールの方にノウハウを学んでもらう事で、２人が帰国しても「持続」していける活動を行っている、ということが挙げられる。この授業を通して、その「持続性」というキーワードを引き出したかったが、実際はそういった観点の感想を書いた生徒は、２，３割であった。学びを“誘導”するのではなく、生徒自身に“気付かせる”難しさを痛感した。

３時限目：JICA の活動から考える

ねらい…ＪＩＣＡが大切にしている支援のあり方について考えることができる。

◆導入◆
・ネパールの道路事情がわかる写真を３枚見せる。
◆内容◆
・道路などのインフラが整う事で社会がどう変化するかを考えさせる。
・JICA は ODA をつかって道路を作る事ができるが、どんどん作る事はしないことを伝える。
　⇒なぜ作らないのかをグループになって考える。（のちに交流する）
・シンズリー道路を紹介。また、シンズリー道路ですら穴があいていたりする現状を伝える。なぜ直さないのかを改めて考えさせる。
・日本政府がやり続けるのではなく、ネパール政府と現地企業が連携して修繕していく事が、自立や未来への持続可能性につながっていくことを知る。

シンズリー道路

ココがポイント

ネパール滞在中に車内から撮影した、でこぼこ道を走る様子の動画を見せることで、道路の舗装などが進んでいない状況を実感してもらえた。

生徒の感想

▶道路を作らないのは、日本の利益が少ないからだ。
▶道路が舗装されていることは、こんなにも幸せなことなんだ。

生徒の感想

（なぜ、JICA はネパールに道路を進んでつくることはしないのか。）

▶ お腹のすいている人に、食べ物やお金を直接渡すのではなく、お金の稼ぎ方を教えるのと同じように、道路をただつくるのではなく、作り方やそれによって生まれた雇用でネパールという国が発展するための援助をすることを JICA は大切にしようとしているのだと思う。
▶ あくまで支援だから、ネパール政府に任せる部分も大きいのではないか。
▶ 昔からの風景を激変させたくないから。

◆所感◆　生徒の感想を見ると、日本にあまり利益がないとか、日本が負担する道路建設費が高いから、といった日本側の利益目線の感想も多かった。物質的な豊かさや経済的な豊かさ以外の豊かさについても考えられる学習を通して、多様な価値観を共に発見していきたいと思えた。

４時限目：ネパールの電力事情から考える

ねらい…①日本の暮らしとネパールの暮らしを比較することができる。
②日本や自分の未来について考えることができる。

◆導入◆
・道路に警察官が立っている写真を見せる。
・信号はあるが点灯していないことに気付かせる。
◆内容◆
・ネパールは雨季に６時間、乾季に１２時間計画停電していることを伝える。
・なぜネパールは停電していて、日本は停電がほとんどないのかを考える。
・ネパールは水力発電、日本は火力や原子力に依存している。
・「水力」「火力」「原子力」のメリット・デメリットを考える。
・持続可能な未来に向けてどの発電方法を選んでいくべきかを考え、交流する。

交通整理をする警察官

ココがポイント

どの電力を選ぶかが重要なのではなく、未来に向けてどの電力を選ぶかを自らの言葉で主張できること、に価値付けした。

生徒の反応

▶ 6時間や 12 時間も停電するなんて生活できる気がしない。
▶ ローソクの生活なら一回してみてもいいかも。

生徒の感想

▶ 電気がないから貧しいと思うのは、私の偏見のように思えてきた。衛生的によくないところはあったが、ネパールの暮らしにもよさがあった。
▶ 私の「あたりまえ」は、あたりまえじゃないと思った。電気がある、ないで幸せははかれない。
▶ 日本の発電にも問題はあると思うが、私はネパールでは暮らしていけそうにない。
▶ 日本はネパールに対して、教えることばっかりなのだと思っていたが、“幸せ”や“発展”の価値観が違う事や人のあたたかさなどネパールの生活から学ぶことがあった。

◆所感◆　水力、火力、原子力それぞれのメリットとデメリットを交流させ、全体でまとめておくことで、自分の意見を考えやすくすることができた。あわせて、どの発電方法を選ぶかは、自分の本音を書きなさいと強調した。生徒の感想を見ると、日本の火力依存体制から再生可能エネルギー体制に変えていくべきだと主張する生徒もいれば、このままの生活を維持したいという生徒おり、多様な意

見がみられた。ただ、“幸せ”の価値観はそれぞれ異なることや、持続可能な生活の維持の重要性について言及している生徒が多く、４回の授業を通したねらいをおおむね達成することができたと思う。

4. 成果

大きく２点ある。

１点目は、ネパールを題材にして、持続可能な未来の創造に向けた学習に挑戦し、実践できたということである。今回の４回分の授業のねらいは、ネパールについて知ってもらう事ではなく、ネパールの実情を通して、「持続性」や「幸せの多様性」について生徒とともに考えることであった。学習や思考の深まりは別として、一貫性のある授業をやり通せたことが次につながる成果の一つ目である。

２点目は、私自身のモチベーションの「持続性」が大いに高まったことである。一過性のもので終わってしまえば、学びの連続にならず、「持続可能」な未来へとつながらない。来年度以降も、よく深化した授業を実践し続けられるよう、学び続けていきたい。

5. 課題

成果とつながることではあるが、いかに深化させるか、ということである。実践して改めて感じるのが、自分自身の知識や手法、体験や実地調査の乏しさである。ネパールでの毎日のできごとが、私の価値観や授業構成を大きく揺さぶった。揺さぶられたということは、まだまだ多くのことを吸収して、ぶれない軸を構成する必要があるし、逆に成長できるということである。生涯にわたって「持続性」のある学びを追求していきたい。

参考文献

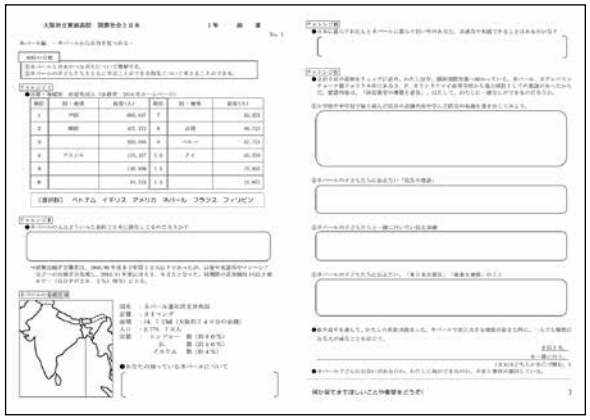
『未来をひらく道 ネパール・シンズリ道路 40 年の歴史をたどる』 亀井温子（佐伯印刷）参考資料

参考ホームページ URL

法務省　在留外国人統計（旧登録外国人統計）統計表

http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_touroku.html

資料１



１限目ワークシート

２限目ワークシート

３、４限目ワークシート